

# 文字組み設定の手引き



Adobe® InDesign® cs2 日本語版



## InDesign CS2 文字組み設定の手引き

1	序	2
2	文字組み設定とは	3
3	定義済み文字組みセットの特徴	3
3.1	行末約物半角	4
3.2	行末受け約物半角・段落1字下げ(起こし全角)	5
3.3	行末受け約物半角・段落1字下げ(起こし食い込み)*	6
3.4	約物全角・段落1字下げ*	7
3.5	約物全角・段落1字下げ(起こし全角)	8
3.6	行末約物全角/半角・段落1字下げ*	9
3.7	行末受け約物全角/半角・段落1字下げ(起こし全角)	10
3.8	行末受け約物全角/半角・段落1字下げ(起こし食い込み)*	11
3.9	行末約物半角・段落1字下げ*	12
3.10	約物全角	13
3.11	行末受け約物全角/半角	14
3.12	行末句点全角・段落1字下げ	15
3.13	行末句点全角・段落1字下げ(起こし全角)	16
3.14	行末句点全角	17
4	禁則調整方式の効果	20
4.1	追い込み優先	20
4.2	追い出し優先	20
4.3	追い出しのみ	21
4.4	調整量を優先	22
5	新しい文字組みセットの設定方法	22
5.1	基本設定の例1	23
5.2	基本設定の例2	24
5.3	基本設定の例3	25
5.4	詳細設定の例1	26
5.5	詳細設定の例2	27
5.6	文字クラスと設定値	29
6	コンポーザの選択	30
7	まとめ	31
8	補遺 用語	32
9	補遺 その他の日本語組版機能について	34
10	補遺 InDesign CS2 での文字組み関連の機能拡張について	47

## InDesign CS2 文字組み設定の手引き

Adobe InDesign CS2 日本語版（以下 Adobe InDesign）は日本語でのプロフェッショナル パブリッシングのために開発された次世代のページレイアウトソフトウェアです。日本語ページレイアウトのワークフローと緻密なタイポグラフィーのコントロールをデスクトップ上で提供するこの革新的なアプリケーションにより、プロフェッショナル ユースの高品質かつ柔軟性に優れたデザインツールを提供します。Adobe InDesign には Adobe Illustrator® や Adobe Photoshop® などのアドビ製品共通のツール、コマンド、パレット等が採用されているので、これらの製品を使った経験のあるユーザは特にスムーズに Adobe InDesign を使用して最良の結果をより早く生み出すことができます。

### 1 序

InDesign はさまざまな日本語組版専用の機能をもっています。特に「文字組み」設定の機能は、必要に応じて日本語組版の効果をこまかく調整することを可能にします。特別のハードウェアやソフトウェアを必要とする専用の写植組版システムなどでは、日本語組版を微調整できる機能をもつものもありました。けれども、標準的なパーソナルコンピュータ上で使用できるページレイアウトソフトウェアの多くは、従来比較的簡単な調整機能しかもっていませんでした。このことは、多様な内容と体裁をふくむ本格的な出版用途にページレイアウトソフトウェアを利用する上で、ひとつの重要な課題でした。

InDesign では、文字組みや「禁則処理」、「連数字処理」、および「分離禁止処理」などの機能を提供することによって、高品位な日本語組版に必要なさまざまな微調整を行えるようになりました。

ここでは、特に InDesign で採用された「定義済み文字組みセット」と文字組み設定の機能について解説します。

## 2 文字組み設定とは

InDesign では、文字を行やページに組み上げていく方法を、いくつかの機能を用いて調整することができます。文字組み設定とは、日本語、欧文、記号類などをふくむ種々の文字の間隔のとりかたや、改行位置などについて、ユーザが指定することを意味します。欧文と和文との間隔や、括弧類と句読点との間隔など、文字組み設定には多くの項目が含まれます。そこで、各種設定のひと組のことを「文字組みセット」と呼びます。用途や目的に応じて、異なる文字組みセットを選択または作成することで、多様な組版体裁に対応することができます。あらかじめ InDesign は 14 種の異なる文字組みセットを用意しています。これら既定の文字組みセットは、日本語組版において慣習的に広く使われている文字組みに対応するもので、ユーザがすぐに選択して利用できるものです。

## 3 定義済み文字組みセットの特徴

文字組みを設定するもっとも簡単な方法は、「定義済み文字組みセット」の中からひとつを選択することです。これは、段落パレットで文字組みポップアップメニューに列挙された定義済み文字組みセットのなかから一つを選択します（図 1 参照）。

InDesign では、あらかじめ定義された文字組みセットが、14 種用意されています。ユーザは用途や目的に合ったものを、そのなかから選択できます。これら 14 種の既定の文字組みセットは、いずれも基本的に JIS X 4051-1995 に基づいていますが、部分的に異なる組版上の特性をもっています。次に、それぞれの文字組みセットについて、それがどのような組版上の特徴をもっているかを見ることにします。

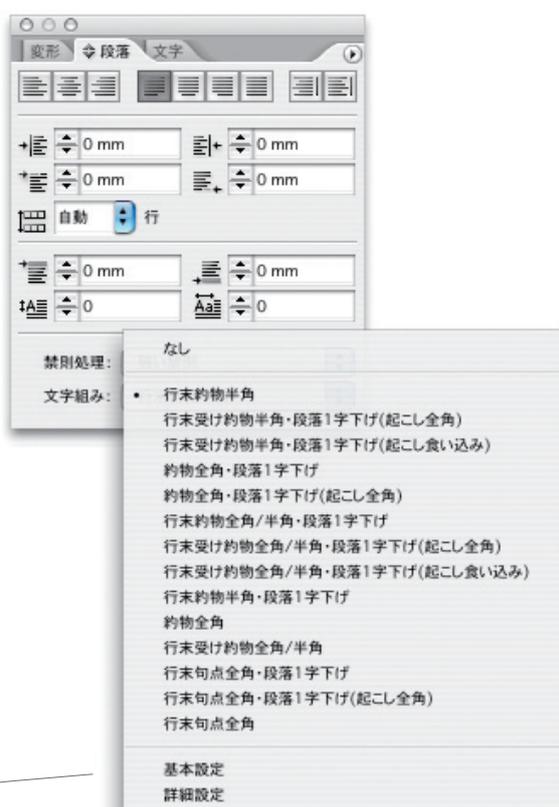


図 1  
14 種の既定の定義済み文字組みセットからの選択

「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図 2.1  
行末約物半角  
設定内容(右)と  
組版例(上)

### 3.1 行末約物半角

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を半角固定とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭の字下げはしません。始め括弧類を半角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース(全角を1とします)

0

#### 行頭の始め括弧類

半角とします(前のスペースは0)。

#### 主な用途など

字下げがなく、行頭および行末の約物・括弧類が半角固定で処理されるため、組み上がりの効果としては、版面の矩形のかたちを強調し、行によって出たり入ったりという変化の少ない版面が必要な場合に使えます。広告ページや雑誌記事など、比較的行数が少ない組版で用いられます。字下げする必要のない、見出し行などに有効に使うことができます。字下げがないと、段落の区切りが分かりにくくなる欠点があります。それに対する解決策としては、段落と段落の間を1行あける、などの方法があります。

#### 備考

行末の中黒(「・」)は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。

文字組みアキ量設定

文字組み: 行末約物半角 単位: %

OK

キャンセル

新規...

保存

セット削除

名称変更...

読み込み...

詳細設定

約物	行中	行頭	行末
起こし約物			
▶ 始め括弧類:	50% (0%~50%)	0%固定	
受け約物			
▶ 終わり括弧類:	50% (0%~50%)		0%固定
▶ 読点類:	50% (0%~50%)		0%固定
▶ 句点類:	50% (0%~50%)		0%固定
中付き約物			
▶ 中点類:	25% (0%~25%)		0%固定
連続する約物			
▶ 終わり括弧類 ⇒ 始め括弧類:	50% (0%~50%)		
▶ 句点 ⇒ 始め括弧類:	50% (0%~50%)		
▶ 読点 ⇒ 始め括弧類:	50% (0%~50%)		
段落字下げ			
▶ 段落字下げ:		なし	
▶ 段落先頭始め括弧類:		始め括弧半角	
和欧間			
▶ 和文と欧文、英数字の間:	25% (12.5%~50%)		

### 3.2 行末受け約物半角・段落1字下げ（起こし全角）

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を半角固定とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を1字下げます。始め括弧類を全角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース（全角を1とします）

1.5

#### 行頭の始め括弧類

半角とします（前のスペースは0）。

#### 主な用途など

段落先頭の始め括弧類が強調されます。ただし、段落先頭を除く行頭および行末は半角固定で処理されるため、版面は比較的揃って見えます。全角と半角との折衷的なスタイルです。組版の様式上の方針や要求項目に、段落先頭の始め括弧類が全角と指定されている場合などに利用できます。

#### 備考

行末の中黒（「・」）は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。

「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などというところ、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危険を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。



図 2.2  
行末受け約物半角  
段落1字下げ（起こし全角）  
設定内容（左）と  
組版例（上）

「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いきえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図 2.3  
行末受け約物半角  
段落 1 字下げ(起こし食い込み)  
設定内容(右)と  
組版例(上)

### 3.3 行末受け約物半角・段落 1 字下げ(起こし食い込み) \*

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を半角固定とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を 1 字下げます。始め括弧類を半角食い込ませます。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース(全角を 1 とします)

0.5

#### 行頭の始め括弧類

半角とします(前のスペースは 0)。

#### 主な用途など

括弧類だけについていえば、結果として段落先頭の字下げなしで括弧類を全角とするのと同じ効果が得られます。段落先頭を除けば、行頭および行末の約物・括弧類が半角固定で処理されるため、組み上がりの効果としては、版面の矩形のかたちを強調し、行によって出たり入ったりという変化の少ない版面が必要な場合に使えます。広告ページや雑誌記事などを中心に広い用途に利用できます。

#### 備考

行末の中黒(「・」)は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。



### 3.4 約物全角・段落1字下げ\*

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を全角固定とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を1字下げます。始め括弧類を半角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース（全角を1とします）

1

#### 行頭の始め括弧類

全角とします（前のスペースは0.5）。

#### 主な用途など

段落先頭を除けば、約物・括弧類の多くが全角固定となります。また、段落先頭の字下げは始め括弧類の有無に関わらず、どちらの場合も見かけ上1字分行われますから、全角ベタを基本とするオーソドックスな組み上がりの効果が期待できます。書籍等の長い原稿を組む場合でも、自然で読みやすく、幅広い用途に利用できる組み方です。

#### 備考

行末の中黒（「・」）は全角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。

「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使えば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などというところ、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。



図 2.4  
約物全角  
段落1字下げ  
設定内容（左）と  
組版例（上）

「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図 2.5  
約物全角  
段落 1 字下げ (起こし全角)  
設定内容 (右) と  
組版例 (上)

### 3.5 約物全角・段落 1 字下げ (起こし全角)

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を全角固定とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を 1 字下げます。始め括弧類を全角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース (全角を 1 とします)

1.5

#### 行頭の始め括弧類

全角とします (前のスペースは 0.5)。

#### 主な用途など

3.4 と異なるのは、段落先頭の始め括弧類が全角となることです。これによって、段落先頭に始め括弧類がある場合も 3.4 に比較して段落先頭行がベタ組みになる可能性が増え、段落先頭の始め括弧類が強調されます。段落先頭の始め括弧類が全角と指定されている場合に利用できます。他の特徴は 3.4 に準じます。

#### 備考

行末の中黒 (「・」) は全角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。



### 3.6 行末約物全角／半角・段落1字下げ\*

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を半角または全角とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を1字下げます。始め括弧類を半角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース（全角を1とします）

1

#### 行頭の始め括弧類

半角とします（前のスペースは0）。

#### 主な用途など

段落先頭の字下げは始め括弧類の有無に関わらず、どちらの場合も見かけ上1字分行われ、行末の約物は全角と半角どちらかが、適宜選択されます。書籍等の長い原稿を組む場合でも、自然で読みやすく、幅広い用途に利用できる組み方です。

#### 備考

行末の中黒（「・」）は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。

「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などというところ、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危険を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

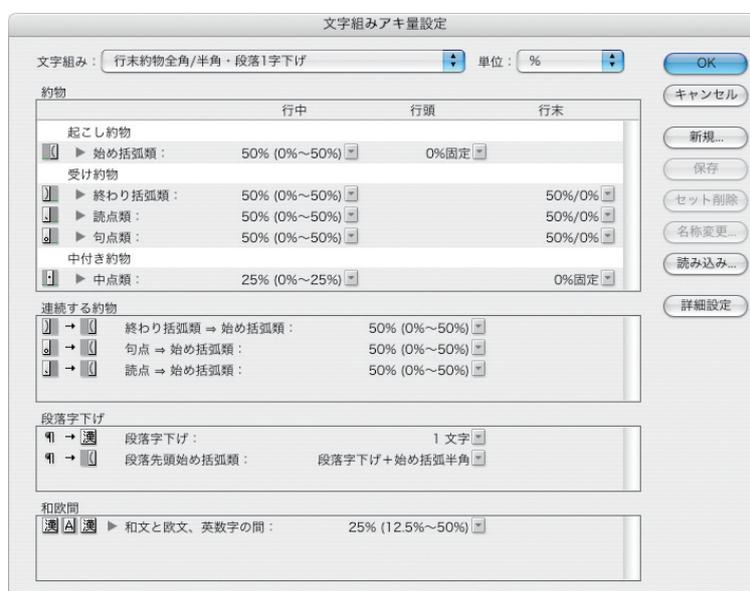


図 2.6  
行末約物全角／半角  
段落1字下げ  
設定内容（左）と  
組版例（上）

「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書」で引いたら、『活版印刷術のこと』とある「など」というと、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危険を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図 2.7  
行末受け約物全角/半角  
段落 1 字下げ (起こし全角)  
設定内容 (右) と  
組版例 (上)

### 3.7 行末受け約物全角/半角・段落 1 字下げ (起こし全角)

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を全角または半角とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を 1 字下げます。始め括弧類を全角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース (全角を 1 とします)

1.5

#### 行頭の始め括弧類

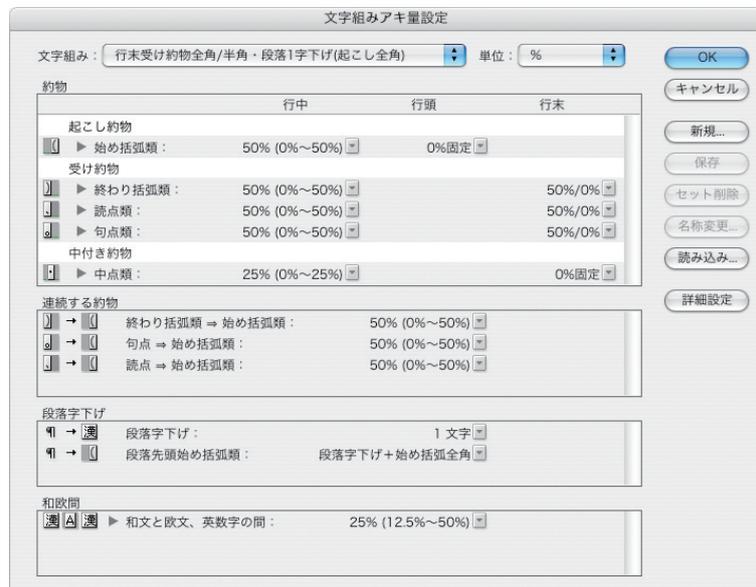
半角とします (前のスペースは 0)。

#### 主な用途など

3.6 と異なるのは、段落先頭の始め括弧類が全角となることだけです。段落先頭の始め括弧類が強調されます。段落先頭の始め括弧類が全角と指定されている場合に利用できます。他の特徴は 3.6 に準じます。

#### 備考

行末の中黒 (「・」) は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。



### 3.8 行末受け約物全角／半角・段落1字下げ(起こし食い込み) \*

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を全角または半角とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を1字下げます。始め括弧類を半角食い込ませます。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース(全角を1とします)

0.5

#### 行頭の始め括弧類

半角とします(前のスペースは0)。

#### 主な用途など

3.6と異なるのは、結果的に、括弧類だけについていえば、段落先頭の字下げなしで括弧類を全角とするのと同じ効果がえられることです。他の特徴は3.6に準じます。

#### 備考

行末の中黒(「・」)は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。

「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いきえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などというところ、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危険を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。



図 2.8  
行末受け約物全角／半角  
段落1字下げ(起こし食い込み)  
設定内容(左)と  
組版例(上)

「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書」で引いたら、『活版印刷術のこと』とある「など」というと、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図 2.9  
行末約物半角  
段落 1 字下げ  
設定内容 (右) と  
組版例 (上)

### 3.9 行末約物半角・段落 1 字下げ\*

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を半角固定とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を 1 字下げます。始め括弧類を半角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース (全角を 1 とします)

1

#### 行頭の始め括弧類

半角とします (前のスペースは 0)。

#### 主な用途など

3.1 に 1 字分の字下げを行ったものです。段落先頭を除いた行頭および行末の約物・括弧類が半角固定で処理されるため、組み上がりの効果としては、版面の矩形のかたちを強調し、行によって出たり入ったりという変化の少ない版面が必要な場合に使えます。広告ページや雑誌記事などの用途では、ごく平均的な組み方の一つです。しかし、字下げされているので、より広い用途に利用可能です。

#### 備考

行末の中黒 (「・」) は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。



### 3.10 約物全角

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を全角固定とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭の字下げはしません。始め括弧類を全角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース（全角を1とします）

0.5

#### 行頭の始め括弧類

全角とします（前のスペースは0.5）。

#### 主な用途など

3.4と異なるのは、字下げをしていないことです。大きく字下げしたくない、見出し行などに使うこともできます。

#### 備考

行末の中黒（「・」）は全角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。

「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などというところ、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。



図 2.10  
約物全角  
設定内容（左）と  
組版例（上）

「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図 2.11  
行末受け約物全角/半角  
設定内容(右)と  
組版例(上)

### 3.11 行末受け約物全角/半角

#### 行末の処理の特徴

行末では、約物を全角または半角とします。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭の字下げはしません。始め括弧類を半角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース(全角を1とします)

0

#### 行頭の始め括弧類

半角とします(前のスペースは0)。

#### 主な用途など

3.6と異なるのは、字下げをしていないことです。字下げする必要のない、見出し行などに使うこともできます。

#### 備考

行末の中黒(「・」)は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。

文字組みアキ量設定

文字組み: 行末受け約物全角/半角 単位: %

OK

キャンセル

新規...

保存

セット削除

名称変更...

読み込み...

詳細設定

約物	行中	行頭	行末
起こし約物			
▶ 始め括弧類:	50% (0%~50%)	0%固定	
受け約物			
▶ 終わり括弧類:	50% (0%~50%)		50%/0%
▶ 読点類:	50% (0%~50%)		50%/0%
▶ 句点類:	50% (0%~50%)		50%/0%
中付き約物			
▶ 中点類:	25% (0%~25%)		0%固定
連続する約物			
▶ 終わり括弧類 ⇒ 始め括弧類:	50% (0%~50%)		
▶ 句点 ⇒ 始め括弧類:	50% (0%~50%)		
▶ 読点 ⇒ 始め括弧類:	50% (0%~50%)		
段落字下げ			
▶ 段落字下げ:			なし
▶ 段落先頭始め括弧類:			始め括弧半角
和欧間			
▶ 和文と欧文、英数字の間:	25% (12.5%~50%)		

### 3.12 行末句点全角・段落1字下げ

#### 行末の処理の特徴

行末では、句点類はつねに全角とします（句点以外の約物は半角固定）。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を1字下げます。始め括弧類を半角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース（全角を1とします）

1

#### 行頭の始め括弧類

半角とします（前のスペースは0）。

#### 主な用途など

3.9に準じますが、行末で句点類を全角固定とします。文の区切りである句点類の後のスペースを維持したい場合に用います。

#### 備考

行末の中黒（「・」）は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。

「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などというところ、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危険を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。



図 3.12  
行末句点全角  
段落1字下げ  
設定内容（左）と  
組版例（上）

「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図 2.13  
行末句点全角  
段落 1 字下げ (起こし全角)  
設定内容 (右) と  
組版例 (上)

### 3.13 行末句点全角・段落 1 字下げ (起こし全角)

#### 行末の処理の特徴

行末では、句点類は全角固定とします (句点以外の約物は半角固定)。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭を 1 字下げます。始め括弧類を全角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース (全角を 1 とします)

1.5

#### 行頭の始め括弧類

全角とします (前のスペースは 0.5)。

#### 主な用途など

3.12 に準じますが、段落先頭での始め括弧類を全角とします。

#### 備考

行末の中黒 (「・」) は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。



### 3.14 行末句点全角

#### 行末の処理の特徴

行末では、句点類は全角固定とします（句点以外の約物は半角固定）。

#### 段落先頭の処理の特徴

段落先頭の字下げはしません。始め括弧類を半角とします。

#### 段落先頭の始め括弧類の前のスペース（全角を1とします）

0

#### 行頭の始め括弧類

半角とします（前のスペースは0）。

#### 主な用途など

3.12 に準じますが、この文字組みセットは字下げをしません。字下げする必要のない、見出し行などに利用可能です。

#### 備考

行末の中黒（「・」）は半角固定ですが、行中では必ずしも全角固定ではなく、行中の括弧類・句読点類とともに行揃えにおける文字間隔の調整処理の対象となります。

「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いきえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などというところ、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危険を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。



図 2.14  
行末句点全角  
設定内容（左）と  
組版例（上）

### 3.15 定義済み文字組みセットの構成と効率的な使い方

上述のように、さまざまな組版のバリエーションに対応できる文字組みセットが既に定義されています。これらは、日本語組版で広く一般的に使用される種々のスタイルに対応しています。用途に合わせて、既定の定義済み文字組みセットから選択してご利用ください。

これら既定の定義済み文字組みセットは、段落先頭での字下げをするものとししないものに分類できます。さらに、字下げの量は全角（文字サイズ）を1としたとき、0, 0.5, 1, 1.5の4種に分類できます（表1参照）。段落先頭での処理については、始め括弧類を半角とするか全角とするかのバリエーションに分類されます。見出しなどでは段落先頭を字下げしない場合が多いので、本文用には字下げするセットを、見出し用には字下げしないセットを選択するとよいでしょう。選択したスタイルを段落スタイルに登録しておけば、効率的に組版のスタイルを切り替えて使用できます。

約物の行末の処理については、半角固定とするか全角固定とするか、あるいは半角または全角とするかに分類でき、さらに特別な行末処理を行う対象について、すべての約物を対象とするか、句点だけを対象とするかの違いがあります（表2参照）。

なお、参考に、前記の図2と次ページの表2には、特に広く一般に用いられていると考えられるセットに「\*」印を付しました。

段落先頭の起こし括弧類の前のスペース（全角を1とする）			
0	0.5	1	1.5
段落先頭の字下げあり	3.3 行末受け約物半角* 段落1字下げ（起こし食い込み）	3.4 約物全角* 段落1字下げ	3.2 行末受け約物半角 段落1字下げ（起こし全角）
	3.8 行末受け約物全角/半角* 段落1字下げ（起こし食い込み）	3.6 行末約物全角/半角* 段落1字下げ	3.5 約物全角 段落1字下げ（起こし全角）
		3.9 行末約物半角* 段落1字下げ	3.7 行末受け約物全角/半角 段落1字下げ（起こし全角）
		3.12 行末句点全角 段落1字下げ	3.13 行末句点全角 段落1字下げ（起こし全角）
段落先頭の字下げなし	3.1 行末約物半角	3.10 約物全角	
	3.11 行末受け約物全角/半角		
	3.14 行末句点全角		

表1  
既定の定義済み文字組みセット  
の分類1

	行末受け約物を対象とする	句点を全角としてあつかう
行末約物半角	3.1 行末約物半角	3.12 行末句点全角 段落1字下げ
	3.2 行末受け約物半角 段落1字下げ（起こし全角）	3.13 行末句点全角 段落1字下げ（起こし全角）
	3.3 行末受け約物半角* 段落1字下げ（起こし食い込み）	3.14 行末句点全角
	3.9 行末約物半角* 段落1字下げ	
行末約物全角/半角	3.6 行末約物全角/半角* 段落1字下げ	
	3.7 行末受け約物全角/半角 段落1字下げ（起こし全角）	
	3.8 行末受け約物全角/半角* 段落1字下げ（起こし食い込み）	
	3.11 行末受け約物全角/半角	
行末約物全角	3.4 約物全角* 段落1字下げ	
	3.5 約物全角 段落1字下げ（起こし全角）	
	3.10 約物全角	

表2  
既定の定義済み文字組みセット  
の分類2

#### 4. 禁則調整方式の効果

組み上がりの効果に影響を与える設定のなかで、文字組みセットと関連の深いものに段落パレットのパレットメニュー中の「禁則調整方式」があります。禁則調整方式には4種類があり、「追い込み優先」、「追い出し優先」、「追い出しのみ」、「調整量を優先」のなかから選択できます（指定のない場合、あらかじめ追い込み優先に設定されています）（図3参照）。

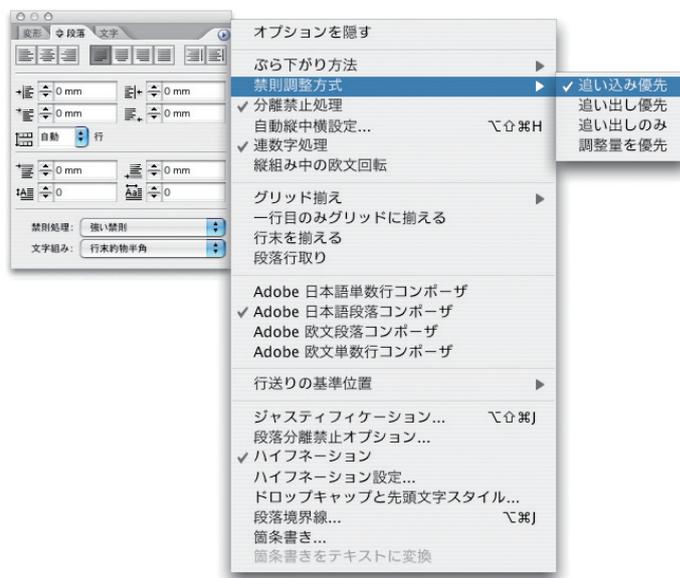


図3  
禁則調整方式の選択

##### 4.1 追い込み優先

禁則処理の対象となる文字列が行末にかかった場合、改行位置を決定する過程で、その文字列を前の行に追い込む（組み入れる）ことを優先します。複数の行が続く場合、この結果として、次の追い出し優先と比較すると、約物の空きが詰まる（狭くなる）頻度が高くなる場合があります。

##### 4.2 追い出し優先

禁則処理の対象となる文字列が行末にかかった場合、改行位置を決定する過程で、その文字列を次の行に追い出す（組み入れる）ことを優先します。複数の行が続く場合、この結果として、上の追い込み優先と比較すると、文字の間隔が広がる（空く）頻度が高くなる場合があります。和文組版ではもっとも広く使われる禁則調整方式で、自然な組み上がりの調子が期待できます。

### 4.3 追い出しのみ

禁則処理の対象となる文字列が行末にかかった場合、改行位置を決定する過程で、その文字列を次の行に追い出します。複数の行が続く場合、この結果として、上の追い込み優先や追い出し優先と比較すると、文字の間隔が広がる（空く）頻度がより高くなる場合があります。

図4

異なる禁則調整方式による組版例（次ページにつづく）

<p>「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使わずに、何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる。危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。</p>	<p>「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使わずに、何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる。危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。</p>	<p>「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使わずに、何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる。危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。</p>
<p>行末約物全角／半角 段落1字下げ 追い出しのみ</p>	<p>行末約物全角／半角 段落1字下げ 追い出し優先</p>	<p>行末約物全角／半角 段落1字下げ 追い込み優先</p>

「タイポグラフィ」ということは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」な

#### 行末約物半角

最初の2行は追い込み優先

次の2行は調整量を優先

(後の例では、禁則文字がない行でも、追い込み処理をする。)

## 4.4 調整量を優先

禁則対象文字を追い込むか、追い出すかの選択、また禁則対象文字であるかないかを問わず改行位置の選択を行う際に、約物の空きか文字の間隔の調整量が最小となる調整方法の選択を行います。この方式では、約物の連続、和欧混植など、禁則処理以外の行でも調整が発生する行でも追い出し・追い込みの処理の対象となるため、文字間隔の調整量を最小化する機会が増し、組版の調子をより均質に保つことが可能になります。

既定の定義済み文字組みセットの中から選択しても、文字と文字との間隔、特に括弧類や約物の前後の間隔が、期待よりも詰まりすぎたり（追い込み優先）、広すぎたり（追い出し優先／追い出しのみ）する場合には、この禁則調整方式に切り替えることで、期待どおりの結果が得られる場合があります。参考として、図4に前述3.1の「行末約物半角」の文字組みセットの組版例に対して異なる禁則調整方式を適用した結果を示します。

### 備考

文字組みアキ量設定で行中の調整量範囲を「50%(0%～50%)」→「50%(25%～50%)」、「25%(0%～25%)」→「25%(12.5%～25%)」、に変更すると約物の空きが詰まりすぎることなく、より調整箇所が目立たない組版結果を得る可能性が高くなります。

この調整量の最小値の変更は約物間をベタ(0%)まで詰めたくない場合にも効果的です。

## 5. 新しい文字組みセットの設定方法

既定の定義済み文字組みセットのどれを使っても期待する組版の効果が得られない場合や、既定のものとは異なる効果を得たい場合には、新しい文字組みセットを作成し、その組版上の特性を設定します。この設定方法には「基本設定」と「詳細設定」の2つがあり、基本設定では設定できない細かな調整をする場合に詳細設定を選択します。どちらの場合も、新しい文字組みセットを作成する場合、ベースとなるセットを既定の定義済み文字組みセットから選択できますので、既定のセットの設定を部分的に変更して新しいセットを作ることができます（作成手順は『Adobe InDesign 日本語版 ユーザガイド』の「第4章 日本語組版」を参照）。ここでは、新しい文字組みセットの設定と組版上の効果との関係について例を用いて説明します。

### 5.1 基本設定の例1

前述の「3.6 行末約物全角／半角・段落1字下げ」の基本設定が図2.6に示されています。「始め括弧類」の設定で「行頭」がすべて「0%固定」に設定されています。段落先頭以外の行頭に始め括弧類がくる場合、それは半角として処理されることを意味しています（いわゆる「天付き」の処理）。これを変更して、行頭にくる始め括弧類をすべて全角で処理する場合には、「行頭」の値を「50%固定」に設定します（図5参照）。



活版印刷術が発明されると、それは急速に全ヨーロッパに伝播し、さらには全世界に広まった。「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などというところ、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる危険・危険を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図5  
行末約物全角／半角  
段落1字下げをベースとする  
新しい文字組みセットの設定例  
設定内容（右）と  
組版例（上）

「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使えばさすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる。危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図6  
行末約物半角  
段落1字下げをベースとする  
新しい文字組みセットの設定例  
設定内容(右)と  
組版例(上)

## 5.2 基本設定の例2

前述の「3.9 行末約物半角・段落1字下げ」の基本設定が図2.9に示されています。「行中」の設定で、句点および読点の後ろにかならず半角の空白を置くようにするには、「約物」中の「読点類」と「句点類」の「行中」の値を「50%固定」に設定し、「連続する約物」中の「句点⇒始め括弧類」、「読点⇒始め括弧類」の値を共に「50%固定」に設定します(図6参照)。



### 5.3 基本設定の例 3

前述の「3.1 行末約物半角」の基本設定が図 2.8 に示されています。行中の設定で、「和欧間」中の「和文と欧文、英数字の間」の値が「25% (12.5% ~ 50%)」に設定されています。見出しなどの用途で、この間隔 (いわゆる「和欧間のスペース」) を狭くしたい場合があります。その場合には、「和文と欧文、英数字の間」の値を「12.5% 固定」に設定するなど、より狭い和欧間のスペースが選択されやすい値に設定します (図 7 参照)。

## 新しい System の誕生

## 新しい System の誕生

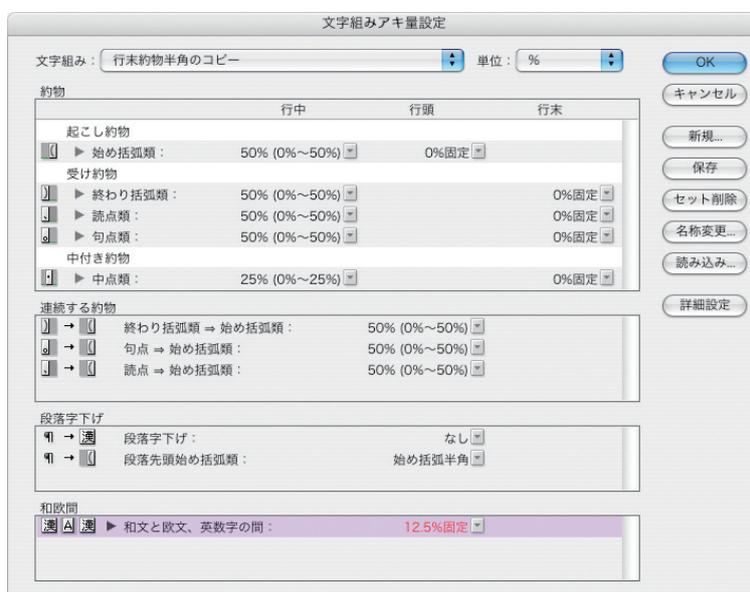


図 7  
行末約物半角をベースとする  
新しい文字組みセットの設定例  
設定内容 (右) と  
組版例 (上)

最初の行は変更前の行末約物半角のセットで組んだ例。

2 行目では和文と欧文との間隔を狭く設定した例

「タイポグラフィ」ということばは、今では、きわめて広い意味で使われている。文字を使いさえすれば何でもタイポグラフィになるらしい。「辞書で引いたら、『活版印刷術のこと』とある」などという、古風過ぎるかもしれない。時代の必要に応じてことばの意味は広がる。しかし、無闇にことばの意味を広げていくと、そのことばの意味の中心にあったものが見えなくなる。危険・危惧を感じる人も多いはずだ。タイポグラフィの中心にあるものを探ることが必要に違いない。

図8  
約物全角  
段落1字下げをベースとする  
新しい文字組みセットの設定例  
設定内容(右)と  
組版例(上)

#### 5.4 詳細設定の例1

前述の「3.4 約物全角・段落1字下げ」の基本設定が図2.4に示されています。ここでは、行末では、約物は全角で処理されましたが、行中では、行の揃え処理において最小ベタ（約物は半角としてあつかう場合）まで約物の前後で詰まる可能性があります。例えば、句点・読点の後にひらがなまたはその他の和字がくる場合、かならず空白を置くように設定するには、詳細設定で、「前の文字クラス」を「句点類」とした上で、「後の文字クラス」が「平仮名」、「カタカナ」および「上記以外の和字」の項目について、最適、最小、最大のすべてを50%と設定します。おなじ設定を「前の文字クラス」を「読点類」としても行います（図8参照）。





図9 (つづき)

文字組みアキ量設定

文字組み: 約物全角・段落1字下げのコピー 単位: %

後の文字クラス: 始め括弧類

クラス内容の例: ( [ { ' " < > 「 『 【

例	前の文字クラス	最小	最適	最大	優先度
(	▶ 始め括弧類:	0%	0%	0%	なし
)	▶ 終わり括弧類:	0%	50%	50%	なし
,	▶ 読点類:	0%	50%	50%	なし
.	▶ 句点類:	0%	50%	50%	なし
:	▶ 中点類:	0%	25%	25%	なし
?	区切り約物:	0%	50%	50%	なし
...	分離禁止文字:	0%	50%	50%	なし
〒	前置省略記号:	0%	50%	50%	なし
〒	後置省略記号:	0%	50%	50%	なし
□	和字間隔:	0%	0%	0%	なし
ノ	行頭禁則和字:	0%	50%	50%	なし
あ	平仮名:	0%	50%	50%	なし
ア	カタカナ:	0%	50%	50%	なし
選	上記以外の和字:	0%	50%	50%	なし
⑧	全角数字:	0%	50%	50%	なし
⑧	半角数字:	0%	50%	50%	なし
A	欧文:	0%	50%	50%	なし
	行頭:	50%	50%	50%	なし
¶	段落先頭:	100%	100%	100%	なし

## 5.6 文字クラスと設定値

詳細設定では、「前の文字クラス」と「後ろの文字クラス」のペアに対して、それらのあいだに置くべき空白の量（間隔）が最適、最小、最大となるべき値をパーセント（全角を 100 とした場合の比率）でそれぞれ設定します。ここでいう「文字クラス」とは、文字の分類のことで、以下の種類があります。

文字クラス	対象となる文字の例とサブクラス
起こし約物	「『 ( ‘ “ [ [ { < 《 【 <small>始めかぎ括弧</small> <small>始め丸括弧</small> <small>その他の始め括弧類</small>
受け約物	』』 ) ’ ” ] ] } } > 》】 <small>終わりかぎ括弧</small> <small>終わり丸括弧</small> <small>その他の終わり括弧類</small>
行頭禁則和字	ゝ ゞ ㇿ ター／～  あいうえおつやゆよわ  アイウエオツヤユヨワカケ など  (図 11 参照)
区切り約物	? ! など
中点類	・ : ; など <small>中黒</small> <small>コロソ</small>
句点類	。 <small>句点</small> <small>ピリオド</small>
読点類	、 <small>読点</small> <small>コンマ</small>
分離禁止文字	… — など
前置省略記号	¥ \$ £ など
後置省略記号	% ‰ ¢ など
和字間隔	(和文の全角スペース)
平仮名	あいうえお など
カタカナ	カキクケコ など
上記以外の和字	漢字 など
全角数字	1 2 3 4 5 6 7 8 9 0
半角数字	1234567890
欧文	ABCDEFGHabcdefgh など
行末	(行末とのペアを指定するため)。
段落先頭	(段落先頭とのペアを指定するため)。

ふつう、文字クラス間の組み合わせについて、できるかぎり「最適」に指定された比率に近くなるよう、そして最小に指定された比率よりも大きく、最大に指定された比率よりも小さくなるように組版されます。ただし、それらの指定を満たすことのできない場合には、その限りではありません。

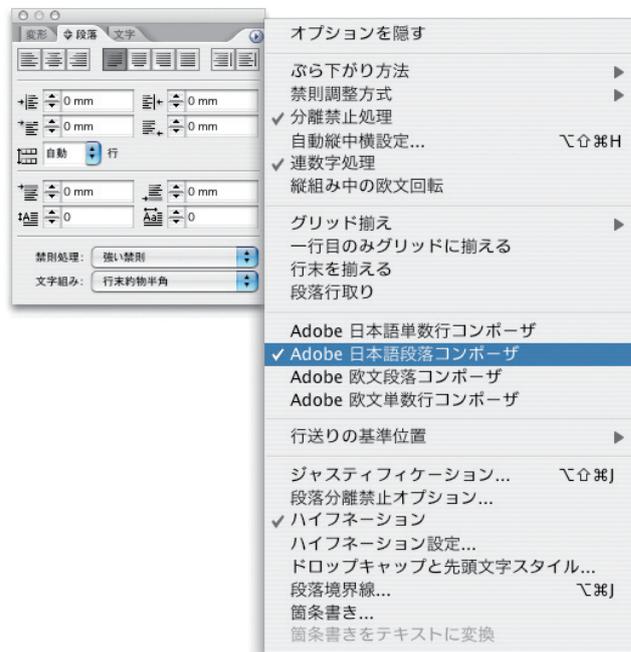
## 6 コンポーザの選択

InDesignでは、ふつう日本語組版を行うソフトウェアモジュールとして「Adobe 日本語単数行コンポーザ」（以下、「単数行コンポーザ」と「Adobe 日本語段落コンポーザ」（旧バージョンでは「Adobe 複数行コンポーザ」以下、「段落コンポーザ」）の2種があり、どちらを用いるか選択ができます（段落パレットのパレットメニューで選択する。図 10 参照）。実際に文字を組むということは、各行の改行位置を決定し、文字間隔等の調整処理を行いながら、与えられた行長や文字サイズの指定に従って文字を配列していくことです。単数行コンポーザを選択した場合、1 行中に含まれる文字の配列だけから判断して、与えられた条件を満たす最適な改行位置を決定し改行します。複数行で構成される場合には、同様の動作をくり返すこととなります。それに対して、段落コンポーザを選択した場合には、段落内の複数行すべてにわたって改行位置の候補を洗い出して、そのなかで最良の改行位置の組み合わせを選択・決定して組版を行います（ふつう、複数行にわたって、詰めたり空けたりといった文字間隔の調整必要量を最小化できる改行位置の組み合わせが選択されます）。出荷時設定においては、段落コンポーザが選択されますが、制作するドキュメントでの必要に応じてコンポーザを切り替えることができます。コンポーザの選択と設定は、個々の改行位置だけでなく、組版の全体的な見え方にも微妙な影響を与える場合があります。用途や必要に応じて異なる設定を使いわけることも可能です（段落コンポーザの詳細については P. 42 「2. 段落パレットの新しい機能」を参照してください）。

なお、日本語をまったく含まない欧文組版には「Adobe 欧文段落コンポーザ」または「Adobe 欧文単数行コンポーザ」を使用されることで、欧文組版により適した組版が可能となります。

図 10

コンポーザの選択



## 7 まとめ

InDesign では日本語の文字組みの微調整が容易に行えることがご理解いただけるでしょう。ここでは、文字組みセットの設定方法を中心に説明しましたが、日本語組版に関する、禁則処理、連数字処理、および分離禁止処理などの他の設定と併用することで、より広い範囲の選択肢のなかから、必要とする組版効果を選択・設定することが可能となります。また、あらかじめ通常の組版で利用できる定義済み文字組みセットが 14 種類用意されているため、期待する組版結果を得るのに特別な設定をする必要がない場合も多いでしょう。

このような InDesign の機能によって、種々の用途に応じて適切な日本語組版を作成することが可能となります。

## 備考

欧文の文字の間隔と単語の間隔の設定は、段落パレットのパレットメニューの「ジャスティフィケーション」を選択して設定してください。文字組みアキ量設定の詳細設定での欧文の文字および単語の間隔の設定は無視されます。

## 8 補遺 用語

以上の記述で用いた用語について、その意味の概要を次に記します。

### 受け

InDesign では、終わり括弧類、句点（「。」）、読点（「、」）を含む文字を「受け」約物と呼びます。

’ ” ) ] } } > 》 」 』 】  
、 。 ， ・

### 追い出し

禁則対象の文字を含む文字列の手前で改行し、次の行に組み入れること。

### 追い込み

禁則対象の文字を含む文字列の後で改行し、それらをその行に、行中の約物の空きを調整するなどして組み入れること。

### 起こし

InDesign では、始め括弧類の以下の文字を「起こし」約物と呼びます。

‘ “ ( [ [ { < 《 「 『 【

### 括弧類

括弧類は終わり括弧類と始め括弧類とに分類され、InDesign では以下の文字を対象とします。

‘ “ ( [ [ { < 《 「 『 【  
’ ” ) ] } } > 》 」 』 】

### 行の揃え処理

行末（または行頭、または行頭行末）を揃える処理を意味する。一定の行の長さになるよう、行頭と行末を揃える処理を行頭行末揃えと呼びます。この場合、1行中の文字幅と文字と文字との間隔の総計が指定された行の長さになるように、文字と文字との間隔を調整する処理が必要となります。これが行の揃え処理における文字の間隔の調整処理で、レイアウトソフトウェアが内部的に行う組版処理のひとつです。（InDesignでの揃えの設定方法については『Adobe InDesign 日本語版 ユーザガイド』の第4章の「段落のフォーマット」の項を参照）。

## 禁則処理

日本語組版において、行の先頭にきてはならない文字、行の終わりにきてはならない文字、連続した場合に間隔を空けたりあいだで改行してはならない文字（分離禁止文字）などが慣習的に定められています（禁則）。InDesign では図 11 に示す文字を既定の禁則対象の文字としています。



図 11  
既定の禁則対象文字を示す  
禁則処理セットのダイアログボックス

## 全角

文字サイズの正方形、またはそのサイズを意味します。

## 段落

一般には、文章の区切りを意味します。英語のパラグラフの切れ目に相当します。また、パラグラフと同義として用いる場合もあります（この文書における「段落先頭」は段落をパラグラフと同義とみなしています）。

## 半角

字幅が全角の半分のサイズの矩形、またはそのサイズを意味します。

## 約物

一般には、記号類全般を意味します。InDesign では、始め括弧類、終わり括弧類、区切り約物、中点類、分離禁止文字、前置省略記号、後置省略記号などがこれに該当します。

## JIS X 4051-1995

日本語文書の基本的な行組版方法について規定した日本工業規格のひとつです。『日本工業規格 日本語文書の行組版方法 JIS X 4051-1995』日本規格協会発行。

## 9 補遺 その他の日本語組版について

現行のInDesign CS2 日本語版にいたるまで、日本語組版機能についてはいくつかの拡張がInDesign 日本語版に対してなされてきました。この補遺では、拡張された機能のそれぞれについて、操作する上で注意すべき点について解説します。

### 1 文字パレットの機能

1.1 カーニング設定の既定のオプションが「和文等幅」、「メトリクス」および「オプティカルカーニング」となりました（図 12 参照）。それぞれの意味をまとめると次のようになります。



図 12  
文字パレットとカーニング方法の指定

#### 和文等幅

この場合、和文はすべて等幅として処理します。カーニングによる文字と文字とのスペースの調整は欧文だけに自動的に適用されます。

#### メトリクス

この場合、フォントにペアカーニングの情報が含まれている場合には、その情報を用いて文字と文字との間のスペースを自動調整します。

#### オプティカル

この機能は現在欧文だけを想定しており、和文には対応していません。欧文の場合、自動的に文字と文字との間隔を調整します。

和文も欧文もカーニングを一切行わない場合には、数値0をカーニングの値として設定する必要があります。和文についてだけカーニングを行わない場合には「和文等幅」を設定します。

### 1.2 OpenType 機能

タイポグラフィ上の効果のために、OpenType フォントはさまざまな機能を含むことができます。それらの機能は、個々のフォントごとに書体デザイナーが適切な内容に設定してフォントに組み込んでいるものです。その機能を適宜選択して利用することによって、良い効果を得ることができます。文字パレットのパレットメニューから、「OpenType 機能」を選択すると現在選択されているフォントで利用可能な OpenType 機能がサブメニューに表示されます（図 13 参照）。現在選択されているフォントでは利用できない機能の名称はブラケットで囲って表示されます。使用する OpenType フォントがサポートしている場合には、以下の機能が利用できます。ただし、実際に使用するフォントでどの機能が利用できるかは、そのフォントの仕様・実装に依存して、変わってきます

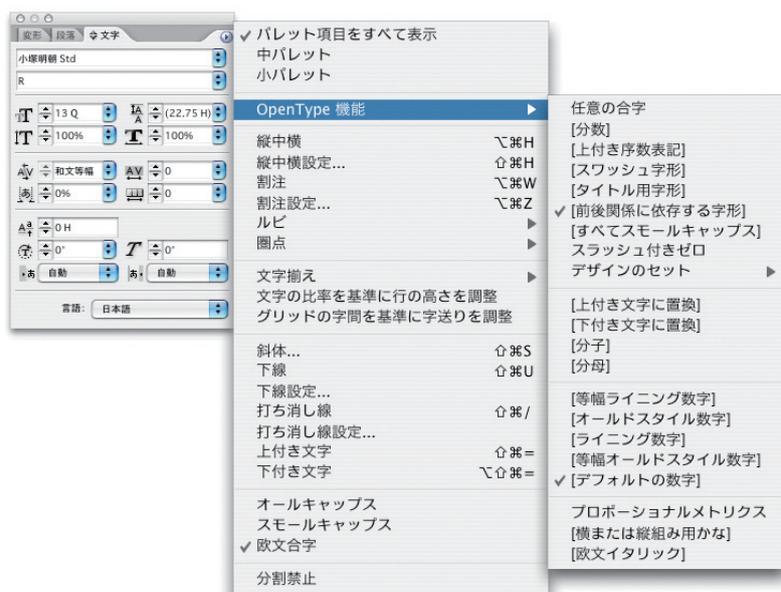


図 13  
OpenType 機能の選択

### 任意の合字

この機能は OpenType の「任意の合字 (discretionary ligature)」と「歴史的な合字 (historical ligatures)」を使用することを指定します。

OpenType の「任意の合字」とは、必ずしも標準的に頻繁に用いられる合字でなく、利用者の好みに応じて、切り替えて用いることができる特殊な合字を意味します。具体的には、フォントによっては ch, ck, ct などをごの「任意の合字」に含める場合があります。例えば、選択した OpenType フォントが ch と ck の合字を任意の合字として含んでいる場合、このメニューアイテムをチェックして有効にすることで、テキスト中に c と h が現れた場合には ch の合字が、c と k が現れた場合には、ck の合字が自動的に用いられます。OpenType の「歴史的な合字」とは、長体の s と小文字の k との合字や、ct や st のような合字のように過去のタイポグラフィにおいて用いられた古風な合字で代替する機能です。「任意の合字」も「歴史的な合字」も、デフォルトでは無効に設定されています。

日本語フォントの場合、任意の合字には、全角に収まる単位記号などが含まれる場合があります (図 14 参照)。

Bristol → Bristol  
perfection → perfection  
キロメートル → 千  
ヘクトパスカル → 百  
医療法人 → 医

図 14  
任意の合字の例

2/3 → ⅔

3/8 → ⅜

図 15  
分数の例

1st → 1<sup>st</sup>

2nd → 2<sup>nd</sup>

3rd → 3<sup>rd</sup>

4th → 4<sup>th</sup>

図 16  
上付き序数表記の例

*Jean Claude Fournier*

→ *Jean Claude Fournier*

*Salamanca* → *Salamanca*

図 17  
スワッシュ字形の例  
書体は Adobe Garamond Pro Italic

FINESSE → **FINESSE**  
BEAUTY → **BEAUTY**

図 18  
タイトル用字形  
書体は Adobe Garamond Pro Regular と  
Silentium Pro Roman I で、  
タイトル用字形を適用するとともに  
サイズを見出し用に大きくした

*a new cooling mechanism*

↓

*a new cooling mechanism*

図 19  
前後関係に依存する字形の例  
書体は Caffisch Script Pro Regular

## 分数

この機能は OpenType の「分数 (fractions)」を使用することを指定します。OpenType の「分数」は、1/3 や 1/12 のような数字とスラッシュからなる分数を意味する文字のならばテキスト中に現れた場合に、それをフォントに含まれる分数用の合字で代替します (図 15 参照)。

## 上付き序数表記

この機能は OpenType の「上付き序数表記 (ordinals)」を使用することを指定します。OpenType の「上付き序数表記 (ordinals)」は 1st や 2nd のような序数を示す文字のならばテキスト中に現れた場合に、それをフォントに含まれる序数表記用の上付きの合字で代替します (図 16 参照)。

## スワッシュ字形

この機能は OpenType の「スワッシュ字形 (swash)」と「前後の文字に依存するスワッシュ字形 (contextual swash)」を使用することを指定します。OpenType の「スワッシュ字形」と「前後の文字に依存するスワッシュ字形」は、特定の文字を、そのスワッシュ形 (チャンサリー体のような手書き書体にあるような、画線の起筆部や収筆部が湾曲して長く伸びた装飾的な文字の形) で代替します (図 17 参照)。

## タイトル用字形

この機能は OpenType の「タイトル用字形 (titling)」を使用することを指定します。OpenType の「タイトル用字形 (titling)」は、特定の文字を、フォントに含まれるタイトル用の文字の形で代替します。タイトル用の文字の形には、例えば書籍のタイトルページの組版や見出しなど、比較的大きなサイズで組むことを想定してデザインされた大文字などが考えられます (図 18 参照)。

## 前後関係に依存する字形

この機能は OpenType の仕様が定める「前後関係に依存する合字 (contextual ligatures)」と「連結形 (connection forms)」を使用することを指定します。例えば Bickam Script という書体の場合、ft という文字の組み合わせがアセンダーのある文字の後にくる場合にだけ、ft は合字によって代替されます。また、Caffisch Script Pro の場合、小文字の o の次にアセンダーのある文字場合には、標準の o とは異なる文字の形によって代替され、次の文字とうまく連結するようになります。手書きや銅版彫刻をベースにしたスク립ト書体などの場合に利用できる場合が多いでしょう (図 19 参照)。

### すべてスモールキャップス

この機能は OpenType の仕様が定める「スモールキャップス (small capitals)」と「大文字をスモールキャピタルに置換 (small capitals from capitals)」を使用することを指定します。選択したフォントがサポートしていれば、この機能を有効にすることで、テキスト中の小文字と大文字のどちらも、すべてスモールキャピタルの形にすることが可能です。スモールキャピタルは書籍のタイトルなどの見出し的な用途に、または文献欄などの著者名の表記、B.C. や A.D. などの略号の大文字表記を目立たせないようにする場合などに用います (図 20 参照)。

NUREMBERG ARABESQUE



NUREMBERG ARABESQUE

図 20

すべてスモールキャップスの例  
書体は Adobe Garamond Pro Regular  
大文字だけの行なので、  
やや文字の間隔を空けて  
スペーシングしている。

### 上付き文字に置換

この機能は OpenType の仕様が定める「上付き文字に置換 (superscript)」を使用することを指定します。OpenType の「上付き文字に置換」は、特定の文字 (数字と小文字の一部など) をそれに対応する上付き文字の形によって代替させます。ふつう、上付きにする必要のある場合、例えば脚注や注釈の番号を組むため、また M<sup>m</sup>e や M<sup>m</sup>es を古風に見せるためなどに用いられます。数字は上付き文字に置換されますが、かならずしもその他の文字に対して上付き文字が用意されているわけではありません。この機能をサポートするフォントの多くは、数字以外の文字については、フランス語の敬称表記に用いる小文字のいくつかだけを対象にしています (図 21 参照)。

x<sub>2</sub> → x<sup>2</sup>

xa → x<sup>a</sup>

No. → N<sup>o</sup>.

M<sup>m</sup>e → M<sup>m</sup>e

図 21

上付き文字に置換の例

### 下付き文字に置換

この機能は OpenType の仕様が定める「下付き文字に置換 (subscript)」と「科学用下付き文字 (scientific inferiors)」を使用することを指定します。OpenType の「下付き文字に置換」は、特定の文字 (数字や記号類、小文字の一部など) をそれに対応する下付き文字の形によって代替させます。そして、必要な位置の調整も行われます。「科学用下付き文字」も同様に下付き文字によって代替しますが、数学や化学式での応用を意図しており、下付きの文字は通常のスライントより低い位置に調整されます。どちらの場合も、数字は下付き文字に置換されますが、かならずしもその他の文字に対して下付き文字が用意されているわけではありません (図 22 参照)。

H<sub>2</sub>O → H<sub>2</sub>O

CH<sub>3</sub>COOH → CH<sub>3</sub>COOH

図 22

下付き文字に置換の例

156/ → 156/

図 23  
分子の例

### 分子

この機能は OpenType の仕様が定める「分子 (numerator)」を使用することを指定します。OpenType の「分子」は、数字のならばの後ろにスラッシュがくる場合に、その数字のならばを分数の分子の文字の形で代替し、スラッシュを分数用のスラッシュの文字の形で代替します (図 23 参照)。

/100 → /100

図 24  
分母の例

### 分母

この機能は OpenType の仕様が定める「分母 (demoninator)」を使用することを指定します。OpenType の「分母」は、数字のならばの前にスラッシュがくる場合に、その数字のならばを分数の分母の文字の形で代替します (図 24 参照)。

0123456789

o123456789 → 0123456789

図 25  
等幅ライニング数字の例

### 等幅ライニング数字

この機能は OpenType の仕様が定める「等幅数字 (tabular figures)」と「ライニング数字 (lining figures)」を使用することを指定します。この機能を有効にすることで、数字を等幅のライニング数字によって代替させることができます。数字以外にも通貨記号などが「等幅数字」の対象に含まれる場合が多くあります。数字を等幅に設定することで、金額などの数値が多く用いられる表組などにおいて、上下の行で位取りの位置がずれたりする問題を防ぐ効果があります。ライニング数字は、大文字の高さに近い位置で高さが揃っている現代的な様式の数字を意味します。大文字との組み合わせに適しています (図 25 参照)。

0123456789 → o123456789

図 26  
オールドスタイル数字の例

### オールドスタイル数字

この機能は OpenType の仕様が定める「オールドスタイル数字 (old style figures)」と「プロポーショナル数字 (proportional figures)」を使用することを指定します。「オールドスタイル数字」は数字を古風なオールドスタイル数字によって代替させることができます。オールドスタイル数字の場合、文字によって高さが異なっています。そのため小文字との組み合わせに適しています。「プロポーショナル数字」が使用されるため、数字によって字幅が一定でない場合があります。数値表記における位取りの位置を揃える必要のない用途では、プロポーショナルの数字を用いることで組版の効果が向上する場合があります (図 26 参照)。

### ライニング数字

この機能は OpenType の仕様が定める「プロポーショナル数字 (proportional figures)」と「ライニング数字 (lining figures)」を使用することを指定します。この機能を有効にすることで、数字を等幅のライニング数字によって代替させることができます。ライニング数字は、大文字の高さに近い位置で高さが揃っている現代的な様式の数字を意味します。大文字との組み合わせに適しています。数字以外にも通貨記号などが「プロポーショナル数字」の対象に含まれる場合が多くあります。「プロポーショナル数字」が使用されるため、数字によって字幅が一定でない場合があります。数値表記における位取りの位置を揃える必要のない用途では、プロポーショナルの数字を用いることで組版の効果が向上する場合があります (図 27 参照)。

0123456789 → 0123456789

図 27  
ライニング数字の例

### 等幅オールドスタイル数字

この機能は OpenType の仕様が定める「オールドスタイル数字 (old style figures)」と「等幅数字 (tabular figures)」を使用することを指定します。「オールドスタイル数字」は数字を古風なオールドスタイル数字によって代替させることができます。オールドスタイル数字の場合、文字によって高さが異なっています。そのため小文字との組み合わせに適しています。数字以外にも通貨記号などが「等幅数字」の対象に含まれる場合が多くあります。数字を等幅に設定することで、金額などの数値が多く用いられる表組などにおいて、上下の行で位取りの位置がずれたりする問題を防ぐ効果があります (図 28 参照)。

0123456789 → 0123456789

図 28  
等幅オールドスタイル数字の例

### デフォルトの数字

この機能は選択したフォントのデフォルトの数字を用いることを指定します。

### プロポーショナルメトリクス

この機能は OpenType の仕様が定める「プロポーショナルメトリクス (proportional alternate metrics)」と「プロポーショナル縦組用メトリクス (proportional alternate metrics)」を使用することを指定します。これは、和文に対しても文字ごとに字幅の異なるプロポーショナルで文字を配置することを指定します。これを有効にすることで、写真植字システムなどで用いられてきたように、和文の仮名などを自動的に詰めて組むことができます。プロポーショナルメトリクスを有効にした場合、ほとんどの仮名文字と一部の記号や漢字類も全角の字幅で組まれなくなる可能性があることに注意してください。プロポーショナルメトリクスは、いわゆるベタ組みとは異なり、文字によって字幅が調整されるため、組版の調子を均質にしたい場合や、デザイン上の視覚的な効果を優先する場合に用いられます (図 29 参照)。

フェイス→フェイス	フェイス→フェイス
フェイス ↓ フェイス	フェイス ↓ フェイス

図 29  
プロポーショナルメトリクス、横組みまたは縦組み用かなの例  
左の例ではプロポーショナルメトリクスだけを適用する。  
右の例ではプロポーショナルメトリクスに加えて、横組みまたは縦組み用かなも適用する例。  
書体は小塚ゴシック Pro M

なお、使用フォントがペアカーニング情報を含む場合、文字パレットの「カーニング」を「メトリクス」に設定すると、自動的にプロポーショナルメトリクスが適用されると共に、文字の組み合わせに応じた字間調節量を定めたペアカーニングも適用されます。

### 横組みまたは縦組み用かな

この機能は OpenType の仕様が定める「横組み用かな (horizontal kana alternates)」または「縦組み用かな (vertical kana alternates)」を使用することを指定します。OpenType フォントは、標準的に用いるかな文字の他に、横組みに最適化したデザインをもつかな文字および縦組みに最適化したデザインをもつかな文字のどちらか、または両方を収容することが可能です。これらの追加のかな文字は、この機能を有効にすることで標準のかなに替わって使用されます。この機能が有効なとき、横組みのテキストに対しては横組み用かなが、縦組みのテキストに対しては縦組み用かなが使用されます（この機能が無効の状態では、標準のかなが縦組み・横組み両用として使用されます。図 29 参照）。

これは fleur de luce という飾り



これは fleur de luce という飾り

図 30

欧文イタリックの例

### 欧文イタリック

この機能は OpenType の仕様が定める「欧文イタリック (italics)」を使用することを指定します。OpenType フォントは、プロポーショナルのローマン（欧文・ローマ字）に加えて、それに対応するイタリック体も含めることができます。この機能を有効にすることで、テキスト中の欧文をイタリック体に切り替えることができます（図 30 参照）。

## 1.3 割注

テキストを選択したあと、文字パレットのパレットメニューの「割注」を有効にすると、指定したテキストを割注として組むことができます（図 31、32 参照）。割注とは、1 行を 2 行に割って注釈などを組むことができます。文字パレットのパレットメニューの「割注設定」を選択することで、割注の指定内容を変更することができます。この「割注設定」では、次の要素を指定します。

フィガロの結婚で有名なボーマルシエ（本名はル・オーギュスタン・カロン・フラン）はバスカビルの母（ビエー）  
型や製造用具を購入して出版を計画した。

図 32

割注の例



図 31 割注設定のダイアログ

## 行数

これは割注の行数を指定します。通常の和文組版では2行とするのが、一般的です。指定しない場合には2行が既定値として使用されます。

## 割注サイズ

これは割注のテキストの文字サイズを、割注機能を使わない場合の文字サイズからの比率で指定します。例えば14 Qのテキストに割注サイズ50%の割注を設定すると、実際の割注テキストのサイズは7 Qとなります。指定しない場合には50%が既定値として使用されます。一般的な利用法としては、50%では小さすぎるという場合、それよりやや大きな値を指定します（その場合、割注を囲むパーレンの幅も同様に拡大する必要があります）。

## 行の間隔

割注の行のあいだの間隔を指定します。指定しない場合には0が既定値として使用されます。一般的な利用法としては、行間がベタだと読みにくいという場合に、スペースを指定します（その場合、割注を囲むパーレンの幅を同様に拡大する必要があります）。

## 揃え

割注の行の揃え方を指定します。指定しない場合には「左／上寄せ」が既定値として使用されます。通常のテキストと同様、割注についても行の揃え方を指定できます。割注では、割注のすべての行末を揃えて組むことがよく行われます。その場合にも、ここで「両端揃え」を指定します。

## 改行オプション

これは、割注を含む行で改行が生じて、割注が複数の部分に分割された場合、最初の部分の割注行の最小文字数と、最後の部分の割注行の最小文字数を指定します。これによって、一定文字数よりも短い割注が行末や行頭にくることを抑制することができます。

## 2 段落パレット

### 2.1 コンポーザの選択

日本語組版を行うコンポーザの指定は、段落パレットのパレットメニューの中の「Adobe 日本語単数行」コンポーザまたは「Adobe 日本語段落コンポーザ」を選択することで行うことができます（図 33 参照）。段落コンポーザは、単数行コンポーザとうまく使い分けることで良好な組版を行うことができます。

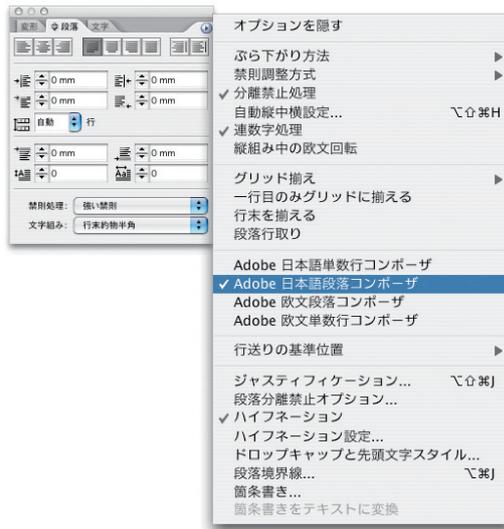


図 33  
コンポーザの選択

### 段落コンポーザの効果と特徴

段落コンポーザは従来の複数行コンポーザと同様、ひとつの段落全体で改行処理の最適化を行います。InDesign 日本語版の段落コンポーザは、必要に応じて、段落中の行全体で必要となる文字間隔の調整量をできるかぎり少なくなるように改行位置を制御します。これによって、特別に長い文字列が次行に追い出された場合などで、行中の文字の間隔が空きすぎてしまう現象を避けることができます。そのために必要な最適な改行位置の選択は自動的に行われます。

段落コンポーザを用いることで、個々の文字原稿の内容・組版指定の特殊性にあまり影響されることなく、いつも良好な組版結果を得ることが容易になります。そのため、欧文を多用する組版や和文の詰め組（プロポーション）や箱組みなどで、疎密の少ない組版を比較的容易に実現することが可能となります。また、和文全角ベタ組みのグリッドへの従属よりも、段落全体のスペーシングと組み上がりの調子（カラー）の均質さを重視する場合などに、段落コンポーザは効果的です（図 34 参照）。

段落コンポーザでは、改行位置の決定は段落全体で最適化されるため、ある行だけを取り上げてみた場合に、その 1 行中の文字数が丁度指定した字詰め（1 行中の文字数）と一致していて、追い出しや追い込みが発生しないと想定される場合でも、その想定と異なる位置で改行される場合があります。そのため、あらかじめ各行について字詰めや改行位置を想定して組版の指定やレイアウトがなされている場合や、全角ベタ組みのグリッドへの従属を最優先する場合には、単数行コンポーザの使用を推奨します。

単数行コンポーザで組んだ例（右側の段は箱組みの例）

ポイントには、日米英で用いられる the American Point System やヨーロッパで用いられる Didot Point などがあり、現在では、一インチの七二分の一を一ポイントとするシステムが Desktop Publishing では広く用いられている。これは DTP ポイントなどと称されることもあるが、現実にはその歴史は古い。十九世紀後半の the American Point System 制定の時点で、既にそのシステムを推す意見があった。

段落コンポーザで組んだ例（右側の段は箱組みの例）

ポイントには、日米英で用いられる the American Point System やヨーロッパで用いられる Didot Point などがあり、現在では、一インチの七二分の一を一ポイントとするシステムが Desktop Publishing では広く用いられている。これは DTP ポイントなどと称されることもあるが、現実にはその歴史は古い。十九世紀後半の the American Point System 制定の時点で、既にそのシステムを推す意見があった。

ポイントには、日米英で用いられる the American Point System やヨーロッパで用いられる Didot Point などがあり、現在では、一インチの七二分の一を一ポイントとするシステムが Desktop Publishing では広く用いられている。これは DTP ポイントなどと称されることもあるが、現実にはその歴史は古い。十九世紀後半の the American Point System 制定の時点で、既にそのシステムを推す意見があった。

ポイントには、日米英で用いられる the American Point System やヨーロッパで用いられる Didot Point などがあり、現在では、一インチの七二分の一を一ポイントとするシステムが Desktop Publishing では広く用いられている。これは DTP ポイントなどと称されることもあるが、現実にはその歴史は古い。十九世紀後半の the American Point System 制定の時点で、既にそのシステムを推す意見があった。

図 34

単数行コンポーザと段落コンポーザでの組版例

左上が単数行コンポーザの例で、最後から3行目の字間スペースがやや広がっているのがわかる。

左下が段落コンポーザで組んだもの。最後から3行目も含めてスペースがより均質に配分されている。

右上は箱組みを単数行コンポーザで行った例で、最終行の字間スペースが他の行と比べて著しく広がっている。

右下の例が、それを段落コンポーザで組んだもの。最終行の破綻が解消され、スペーシングがより均等化されている。

## 2.2 ハイフン設定

段落パレットの「ハイフン設定」を選択すると、ダイアログボックスが表示され、ハイフンのつけ方を制御するいくつかの設定が可能となります（図 35 参照）。

### 単語の最小文字数

ハイフンをつける対象とする単語の最小文字数を指定します。これより少ない文字数の単語にはハイフンをつけません。

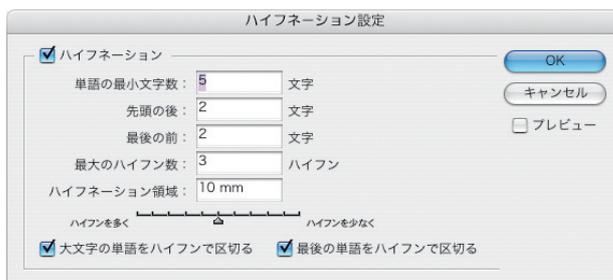


図 35 ハイフン設定のダイアログ

### 先頭の後

### 最後の前

ハイフンをつけて分割する単語の先頭または最後からの最小文字数を指定します。例えば、3 を指定すると、aromatic は、ar-omatic や aromat-ic ではなく、aro-matic とハイフンがつくことになります。

### ハイフン限界

その段落中でハイフンをつけることのできる個数の最大値を指定します。ただし、この値に 0 を指定した場合には、ハイフンの個数には限界がなくなります。

### ハイフン領域

段落が「左／上揃え」または「右／下揃え」で揃えの指定がされている場合に、単語を分割してもよい行末からの距離を指定します。ただし、この設定は段落コンポーザを使用する場合にだけ適用されます。

### 「ハイフン多く」・「ハイフン少なく」のスライダーによる指定

これによって、ハイフンのつく頻度を調整することができます。

### 「大文字の単語をハイフンで区切る」

このチェックボックスを解除することで、大文字だけからなる単語をハイフンで分割しないように指定することができます。OK ボタンを押してハイフン設定のダイアログボックスを終了することで有効となります。

### 3 合成フォントでの「文字中央での拡大・縮小」

書式メニューの中の「合成フォント」を選択し、既存の合成フォントを選択するか、「新規」で新しい合成フォントを作成します。そして、合成フォントを構成するフォントを指定する際に、「かな」（または特例文字セット）を選択した場合に、文字の相対的な大きさを指定する「サイズ」、「垂直比率」および「水平比率」をパーセント単位で指定しますが、このときに、右端の「」マークのチェックボックスをチェックすると、「文字中央で拡大縮小」が有効になります（図 36 参照）。この場合、全角の正方形の中心を基準にかな文字の大きさを拡大縮小することができます。その場合、拡大・縮小比率に関係なく、かな文字の字幅は変化しません。

この機能は、かな書体の字面（全角の正方形の中で実際に文字の形が占める範囲）の比率を拡大・縮小によって調整して、漢字などの他の構成要素とデザイン上整合させる際に有効です（図 38 参照）。

この「文字中央で拡大縮小」の機能は、かな文字とユーザが指定する「特例文字セット」に対してだけ利用可能です。また、この機能を有効にした場合には、かな文字のベースライン位置の変更は不可能になります。

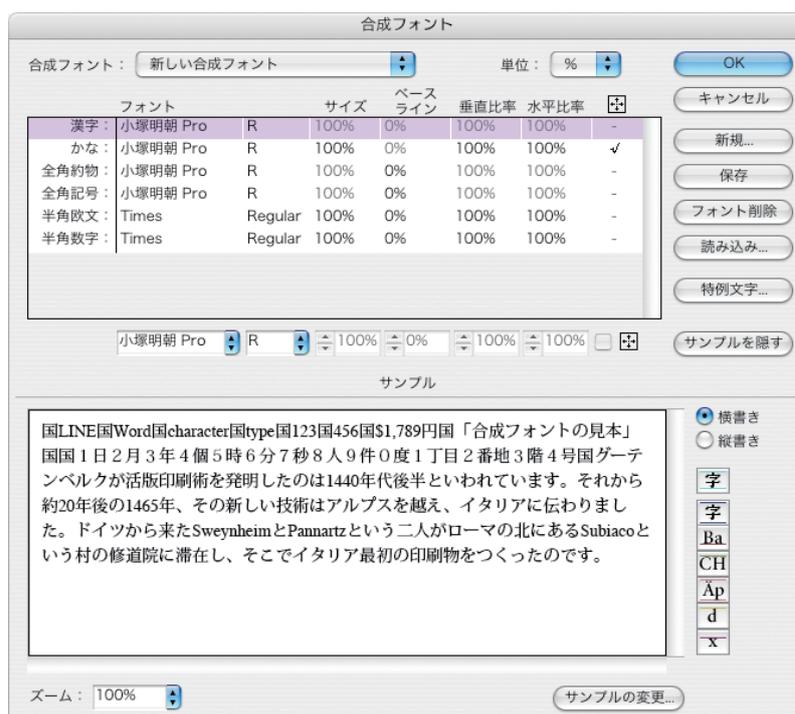


図 36  
合成フォント編集のダイアログ

新しいタイポグラフィの世界が広がる

新しいタイポグラフィの世界が広がる

図 37 文字中央で拡大縮小をかなに適用した例

	列1	列2	列3	列4
行1	100	200	300	500
行2	600	700	800	1,000
行3	1,100	1,200	1,300	1,500
行4	1,600	1,700	1,800	2,000
行5	2,100	2,200	2,300	2,500

図 38  
表の例

行5	行4	行3	行2	行1	列1
2,100	1,600	1,100	600	100	2,100
2,200	1,700	1,200	700	200	2,200
2,300	1,800	1,300	800	300	2,300
2,500	2,000	1,500	1,000	500	2,500

図 39  
縦組みで表を組んだ例

## 6 表の方向性について

ここでは、日本語の組版で必要となる縦組の表を InDesign で作成する場合の注意点について述べます。

InDesign の表は方向性を持ちます。すなわち、フレーム（テキスト・フレームまたはフレーム・グリッド）が横組みか縦組みかによって、そのフレームに挿入された表の組み方向が、横組みか縦組みか、が決まるのです。

例えば外部のファイルから表のデータを読み込む場合を考えます。もっとも基本的な表のデータというのは、一つのレコードがいくつかの列に対応する項目（フィールド）からなっていて、レコードが複数存在する場合があります。そして、行はレコードに、列はフィールドに対応します。

例えば図 38 に示すような表のデータがあるとして（これ自体は最初横組みで組まれています）。このデータを縦組みで組んだ場合の例を図 39 に示します。ここでわかることは、横組みで組んでも縦組みで組んでも、例えば 3 行目の 4 列目のセルの内容は同じセルの内容を示していなければいけないということです。表が横組みか縦組みかの違いは、行と列で参照されるセルの配列の視覚的な表示上の進行方向の違いにすぎません。セルのデータ自体の並びが変わるわけではありません。もともとのデータの順序と構造は、どのような組み方をした場合でも保存しなければなりません。表の組み方によって表内のセルの内容が違ったり、誤解されることがあってはなりません。このことをまとめる次のことがいえるでしょう。

### フレームの組方向が表の方向となります

表の方向とは、行および列で参照されるセルの配列の視覚的な方向を指します（1 行のセルの並びが左から右に進む状態が横組み、上から下に進む状態が縦組み）。セル内のテキストの組み方向はデフォルトでは表の方向に一致します（横組みの表のセル内のテキストの組み方向は横組み、縦組みの表のセル内のテキストの組み方向は縦組み）。

表の方向とは別に、セル内のテキストの組み方向を変更することができます

例えば、図 40 のように、縦組みの表中のセルを、横組みで組むことができます。個々のセル内部のテキストの組み方向とそのセルを含んでいる表の方向とは独立しています。現実には縦組みの表で、各列の見出しの部分だけを横組みで組む場合は多くあります。

横組みの表だけを用いている場合には気づきにくい点ですが、InDesign の表の方向性の特徴、表の方向性とセル内部のテキストの組み方向との違いは重要なポイントです。特に、伝統的な和文組版で用いられることの多い縦組みの表を作成する場合に重要です。和文組版で必要となる縦組みの表を扱えることは InDesign の表の機能の大きな利点となっています。

個人会員		企業会員			種別一
普通会員	会友	賛助会員	普通会員		種別二
大岡十兵衛	岡本源太	加茂季保商店	肥後交易社	藤原商会	会員名
五千元	貳千元	五千元	九千元	九千元	会費
		貳万円	壹百萬円	壹百萬円	寄付金
東京都	埼玉県	京都府	熊本県	東京都	本籍・所在地

図 40 もうひとつの縦組みの表の例  
表の方向性とセル内のテキストの方向性とは独立して設定できることがわかる。

## 10 補遺 InDesign CS2 での文字組み関連の機能拡張について

### 1 縦組み欧文に対する垂直・水平比率の方向を切り替える

CS2 より前のバージョンの InDesign 日本語版では、縦組み中の文字の垂直・水平比率を文字パレットで変更した場合、日本語の文字と欧文（90 度回転されているプロポーションルーマン）とで、比率が適用される方向が異なっていました。InDesign CS2 日本語版では、その適用方向を同じにすることができます（図 41 参照）。

編集メニューから、環境設定の組版を選択し、「文字組み互換モード」の「縦組み中の欧文に垂直・水平比率を適用する方向の切り替え」のチェックボックスを有効にすることで、縦組み中の欧文も和文と同じ方向に垂直・水平比率が適用されます。新規に文書を作成した場合には、この機能がはじめから適用されます。CS2 以前のバージョンで作られた文書を開いた時点では、この新しい機能は適用されません。この機能を適用する場合は、上記の環境設定から設定する必要があります。

### 2 CID ベースの文字組み

CS2 より前のバージョンの InDesign 日本語版では、文字組はテキスト中の文字のコード（Unicode）とそれを組版上の機能によって分類した文字クラスを利用して、文字間のスペース調整などの文字組み処理を行って来ました。InDesign CS2 では、OpenType フォントまたは CID フォントを用いる際には、字体ごとに割り当てた CID（字体を識別するための番号）とそれを組版上の機能で分類したグリフクラスを利用して、文字間のスペース調整などの文字組み処理を行います。

編集メニューから、環境設定の組版を選択し、「文字組み互換モード」の「CID ベースの文字組みを使用」のチェックボックスをチェックすることで、CID ベースの文字組みが適用されます。新規に文書を作成した場合、この機能ははじめから適用されます。CS2 以前のバージョンで作られた文書を開いた時点では、この機能は適用されません。この機能を適用する場合、上記環境設定からの設定が必要です。

CID ベースの文字組みの有効性は、字形パレットで字形を切り替えた場合に明らかとなります。

図 42 は CID ベースの文字組を無効にした場合で、1 行目の L と P とは全角の英字を入力したものです。その L と P とを選択して、字形パレットのメニューから「等幅半角字形」を設定した結果が 2 行目です。字形は等幅半角に切り替わりましたが、テキスト中の文字コードが所属するクラスは変わらないので、それに基づいた文字組の結果は、1 行目と同様に、全角の和文の文字として取り扱われるため、L と P の前後にスペースは挿入されず、ベタのまま組版されます。

3 行目の例は、人名などを和文が表記されているため、それに続く出没年の表記を和文のパーレンで囲った例です。特別な文字（パーレンの連続



図 41 縦組みの欧文に対する比率設定  
「縦組み中の欧文に垂直・水平比率を適用する方向の切り替え」を無効にした場合（上）と有効にした場合（下）の動作の違い。

古い L P 盤レコード  
古い LP 盤レコード  
ピエトロ・ベンボ（1470-1547）は学者だった。  
Pietro Bembo（1470-1547）は学者だった。

図 42 CID ベースの文字組を無効にした場合

や句読点など)がパーレンの前後にくることのない通常の文字組みでは、このようなパーレンの字形の前(または後)には半角のアキができるように組まれます(結果的には全角パーレンを用いた体裁になります)。この開き・閉じパーレンをそれぞれ選択して、字形パレットのメニューから「プロポーショナル」に設定した結果が4行目です。これは、欧文のパーレンの扱いとなります。それにあわせて、この例では英文の人名を使うように変更しました。この4行目の例は、一見問題がないように見えますが、字形を「プロポーショナル」に変えても、このパーレンの文字コードには変化がないため、その組版上の属性も変化しないため、最初の開きパーレンの前の半角のアキ量に変化がないことがわかります。

図43はCIDベースの文字組みを有効にした場合です。1行目は変化がありません。LとPとは全角の和文として入力したものです。そのLとPの字形を「プロポーショナル」に切り替えた結果が2行目です。字形が「プロポーショナル」に切り替わっただけでなく、Lの前とPの後に和文・欧文間のアキが挿入されているのがわかります。また、3行目の例では、パーレンは和文の全角パーレンで入力したのですが、その字形を「プロポーショナル」に置き換えた結果が4行目です。この場合、最初の欧文の文字列と開きパーレンの後のアキがなくなってしまうのがわかるはずですが、これは、欧文のプロポーショナルのパーレンになったために、明示的にテキスト中にワードスペース(単語間のスペース)を挿入する必要となる場合です。5行目にそれを編集してワードスペースを追加した例を示します。もし、「Pietro Bembo」という文字列が欧文ではなく和文で記されていれば、今度は和文・欧文間のスペースがパーレンの前に挿入されるように組版が行われるはずですが(6行目参照)。CIDベースの文字組みを有効にすることで、字形パレットで字形を切り替えた場合でも、切り替えの結果に即した文字組みが可能となります。

### 3 段落行取り

従来、文字パレット上で指定する行取りは、本文とは異なる大きさの見出し行を本文のグリッドに沿った前後の行との距離を均等に自動調整して配置するもので、それは単独の行ごとに機能するものでした。InDesign CS2で導入の段落行取りの機能を用いれば、複数行にわたる段落全体を対象として行取りを指定可能となりました。通常の間取りより広い用途で、本文中に挿入される見出し行などに応用できます(図44参照)。

## 11 その他の補遺

### 1 フレームグリッドでの字間設定と欧文との関係

InDesign CS以後、フレームグリッドでの字間設定は、欧文には適用されず、和文に対してだけ適用されます(図45参照)。

古いL P盤レコード  
古いLP盤レコード  
ピエトロ・ベンボ(1470-1547)は学者だった。  
Pietro Bembo(1470-1547)は学者だった。  
Pietro Bembo(1470-1547)は学者だった。  
ピエトロ・ベンボ(1470-1547)は学者だった。

図43 CIDベースの文字組みを有効にした場合

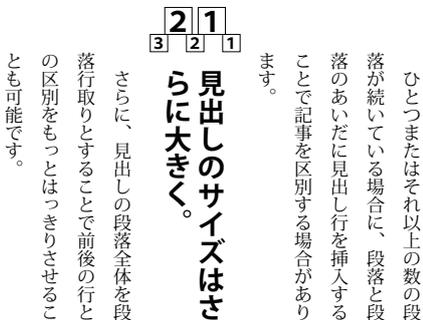


図44 段落行取りの応用例(サイズの異なる見出し複数行が本文中に挿入された例)

和文は詰めていますが、欧文 roman は詰まりません。  
和文は詰めていますが、欧文 roman は詰まりません。  
和文は詰めていますが、欧文 roman は詰まりません。  
和文は詰めていますが、欧文 roman は詰まりません。  
和文は詰めていますが、欧文 roman は詰まりません。

図45 フレームグリッドでの時間設定は欧文の字間には反映されない

